

9.11後の新しいパラダイムを求めて

—テリー・テンペスト・ウィリアムスの9.11受容

岩 政 伸 治

はじめに

2001年9月11日に発生したアメリカ同時多発テロは、アメリカのみならず、世界とその秩序を様々なレベルで揺るがし、そしてその余震は今でも活発で終息の気配さえ見えない。一日にして世界を一変させたこの出来事に対して、同時多発テロ後の情勢をどう理解するか多くの議論がなされてきた。ともすると東洋対西洋、キリスト教対イスラム教といった固定概念による性急な、もしくは故意の判断がメディアを飛び交う現在、私たちは既存の世界観に変わる新しいパラダイムを求めているように思える。

しかしながらこの同時多発テロ直後、アメリカにおいて多くの知識人は、政府がとった政策—オサマ・ビンラーディンをかくまったとされるアフガニスタンのタリバン政権への戦争、そしてテロの温床にして悪の枢軸¹と名指ししたイラクに対する戦争について沈黙を守り、またメディアがそういった発言を取材、掲載することを控えたのに対して、インターネット上では異業種の顔さえお互い知らない人々による従来の枠組みに囚われない論議が活発に交わされていた。

本論は、このアメリカ同時多発テロを実際に体験した一人のネイチャー・ライター、テリー・テンペスト・ウィリアムス (Terry Tempest Williams, 1955-) が雑誌オリオン (*Orion*) のウェブサイトに掲載したエッセイ 'Scattered Potsherd' が、従来のアメリカ的価値観を解体し、新しいパラダイムを求道する道筋を、一つの文学的レトリックを構築するプロセスとして描いていることを明らかにする。

1. 解体

'Scattered Potsherd' (散らばった陶器のかけらの意) は解体の物語である。陶器に譬えられた既存の秩序の解体、私たちが拠り所としている価値観の解体、そして世界経済の象徴であり、アメリカ繁栄の象徴であった貿易センタービルの解体、またこれらの解体が引き金となって起きたコミュニティの解体、家族、友人、人間関係の解体。ウィリアムスはまずこの物語の構成において、これらの解体を表現し、続いて実際に身の回りで起こった出来事を回想することで歴史、神話を解体、そして既存の価値観を解体するのである。ここでは 'Scattered Potsherd' に描かれる「解体」が、様々なレベルの重層的な構図を持って描かれている事実を明らかにし、そしてそこで解体され、また解体されつつある対象について考察する。

1.1. 解体という構図

‘Scattered Potsherd’はそのタイトルが示す通り、13の断片化された章から成り立っている。13が西洋では死刑台の段数を想起させる数であり、タロットカードでは死神を指し、終わり、破壊、死と再生を意味する。また聖書において、最後の晩餐が13人であったことなどから不吉な数として理解されてきた歴史をウィリアムスは意識しているのかもしれない。「断片化された」というのは、最も長い章でも7つの段落しかなく、最も短い章はたった一文で終わっているからである。文の長さで見ると、13章中、3章と9章にそれぞれ5段落、7段落と二つのピークがきている。世界貿易センタービル崩壊が地震に譬えられて冒頭で紹介されていることを考えると、この二つのピークは地震の典型的な二つの振動パターンであるS波とP波を連想させ、またそれぞれが二つの飛行機の衝突をイメージさせる。実際、貿易センタービルの崩壊は、一つ目の衝突が崩壊の引き金となり、二つ目の衝突は崩壊の決定的な打撃となっている。²

ではこの二つのピークは何を意味するのであろうか。一つ目のピークは3章にやってくる。

Washington, D.C. : Yellow police tape is wrapped around city blocks like its own terrorist package. I cannot get back to my hotel. For hours, I walk the streets of our nation’s capital, alone, never have I felt more alone, far from my home in the redrock desert of Utah. I cannot reach home. All phone lines are jammed.³

ここでは実際の筆者によるテロの体験が、「震源地」から最初のピークとして到達し、その影響の波紋を肌で感じるがごとく描かれている。逃げまどう人々もその群衆の一人である。電話は繋がらず、立ち入り禁止のテープが交通システムを麻痺させ、結果として交通手段はすべて遮断され、首都ワシントンは、行き場のない、戻る場所さえ見つからない、巨大な迷路となる。文明の象徴であるコミュニケーションの手段がすべて解体され、人々は行く先さえも失うのだ。神が用意した新天地アメリカへの巡礼としてヨーロッパから逃れたピューリタンが目当たりにした、自分たちを疎外する荒野、またカターディン山に登頂した超絶主義者ヘンリー・デヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) が遭遇した、普段親しむ自然とは異なる、自己の存在を否定する物自体よろしく、コミュニケーションの手段を失った大都市は、かつてその先達たちが接続を試みた、人間の理解を超えて立ちほだかる他者、いわば現代のウィルダネスとして顕在化する。⁴ それゆえウィリアムスが見た、逃げる人々の眼差しに映ったのは、このウィルダネスである。同じ章の続く文章を見てみよう。

Looking into the eyes of individuals on the street as they are fleeing by foot, by car, by anyway possible, I see a gaze I have never encountered among my fellow citizens. It isn’t fear exactly, closer to disbelief, not yet panic. The only comparable eye strain I have witnessed before is something a kin to a herd of sheep being circled by coyotes in the windy sage flats of Wyoming. (III, para. 3)

ここでは家畜として人間、そして人間が築いてきた文明に同化したヒツジと、決して手なずけることのない野生の象徴であるコヨーテの存在が対比されている。そして彼らが位置するのは文明の中心ではなく、ワイオミングの原野である。ウィリアムスが逃げる人々の眼差しの奥に見たのは、文明が解体されることで大都市に突如現れたアポカリプティックなウィルダネスだったのだ。

二つ目のピークは9章にある。ここでは今までの既存の価値観が解体され、新しい価値観の可能性が、アメリカ先住民のホピ族の言葉の中に暗示される。ユタ州の自宅に戻ったウィリアムスはホピ族の友人に会い、アメリカが先住民から水の利権を奪い、コミュニティを解体した歴史を紹介する。そして解体の憂き目に遭い、傷ついたアメリカがかつて解体者の側であった史実が、ホピ族の中で伝承されているある予言と重ねられている。ホピ族の間には、もともと人間は現代の文明以前に文明を築き、解体したという伝説があり、それによると、現代はその後に起こった文明である第4の世界であり、すでに第5の世界への移行が始まっているというのだ。

この二つのピークには共通点がある。先に挙げたウィリアムスの祖先が作り上げたアメリカと、先住民が作り上げた二つのコミュニティの解体、またともにアポカリプティックなヴィジョンが提示されていること、そして二つのピークはともに次の章がそのカタルシスとして用意されていることである。例えば4章では交通機関が復旧し、家路につくために空港に向かうウィリアムスが出会ったタクシー運転手とのやりとりが描かれる。彼はアフガニスタンの出身で、危険だから家においてという母の制止を振り切って、家族のために働いている。安全のために別の車をつかまえることを勧める運転手にウィリアムスは泣き崩れる。10章ではニューヨーク市が世界貿易センタービルの跡地であるグラウンドゼロの土を壺に詰めて遺族に送ることを表明、その場所が聖なる場所となったことが描かれている。

このようにウィリアムスは解体を地震の揺れのプロセスとして描くことで、作品自体を解体の構図として提示することに成功している。

1.2. 解体された物語

We watch the Twin Towers of the World Trade Center struck by our own planes, then collapse under the weight of terror. 110 stories. Thousands of life stories. Gone. Collapsed dreams. Compressed sorrows. Shattered innocence. Blood. They say what they need from us now is blood.
(II, para. 1)

ウィリアムスはこの同時多発テロによって、数千もの“life”（人生・生活・生命）の「物語」が失われたと記している。この「物語」は更に、「崩れ落ちた多くの夢」、「押しつぶされた悲しみ」、「打ち砕かれた無実」、「血」へと発展していく。語るすべを失った犠牲者たちの過去、歴史という物語、夢という未来の物語、最後の瞬間、犠牲になる理由のない無念、どこに住み、どういった家族、血縁がいるといった語るべき物語が轟音とともにすべて解体され、消し去られてしまったのである。ウィリアムスは実際この作品の中で、アメリカという文明の元に育まれた自分の価値観に関係する多様かつ重層的な言説の解体を指摘している。

ウィリアムスが最初に、「数千もの人生の物語」を挙げていることは注目に値する。同時多発テロの直後、ブッシュ大統領は「合衆国」という共同体をくり返し強調し、またテレビやラジオを通じて政府が連日のように、“U.S.A! U.S.A!”とグラウンドゼロを訪れたブッシュ大統領を囲んで人々が連呼する様子を巧みに使いながら国家の威信回復を狙ったことと対照的である。ウィリアムスにとってアメリカとは、国家という抽象的な概念ではなく、実在する場所であり、住む人々の数だけの“life”がアメリカという共同体の物語を構成しているのである。ウィリアムスが「アメリカ」を意識するとすれば、それは国家ではなくそういった共同体であり、それが解体する危機を表明しているのだ。

次に、物語の解体は夢という形でも示されている。亡くなった人々が、そして残された人々が見てきた夢であり、アメリカという場所において人々が見てきた夢である。ウィリアムスは逃げる途中、かつて公民権運動の先頭に立ったあのマーティン・ルーサー・キング牧師が「私には夢がある」と演説をした場所を通り、いま夢はどこにあるのかと自問する。交差点ではパレスチナ人が「俺じゃない、あんたらがやったんだ」と泣き叫びながらひざまずき、車が立ち往生している。母国を失い、土地を失ったパレスチナ人が自由の国アメリカで見た一抹の夢が潰えたというのか。アメリカに移住した、先ほどのアフガニスタン人のタクシー運転手とその家族も同様だ。このテロはアメリカ、そしてアメリカン・ドリームという神話をも解体した。そしてアメリカ社会に育ったウィリアムス自身の価値観をも解体したのである。

さらに、この夢の解体には、多くの人々の物理的な「死」と、残された人々の死への恐怖が関わっていることが「血」の存在によって暗示される。ここで「死」は人々が抱く抽象的な「物語」を解体するが、同時に血によって喚起された死への恐怖は無意識下にあった物理的な「生」を否認なしに意識させる。ウィリアムスは解体を語ることで、その裏に再生を暗示している。

Blood knowledge. What will we come to know that we did not understand before? Who knows how this has entered our bloodstream? (II, para. 2)

ここで、目に見えない抽象的な物語ではなく、生理的な死を視覚的に現し、そしてその裏に生身の人間と生身の物語再生を意識させる「血の知識」は、メタレベルで物事を理解することにすでに慣れてしまった私たちにはかえって難解なものとなる。感じてはいても今まで言語化し、理解してこなかったものをそれでも理解する必要性を、ウィリアムスは問いかけているようである。ウィリアムスにとって、この解体という悲劇を語ることは、1つのカタルシスであり、同時に観念化された人間の物語を解体し、生身の人間を顕現させ、物語の持つ生理的な“re-creation”の力を喚起する手段なのである。

2. 彷徨

“Scattered Potsherds” はまた、彷徨の物語でもある。9月11日の同時多発テロは人間が作り上げた秩序を様々なレベルで解体した。作品では秩序を失った人々が、導きを失い、行くあてを失い、帰る場所さえも失った様子が克明に描かれている。ここでは、まず作品に見られる彷徨の

モチーフが、彼女の出世作となった作品の冒頭ですでに用いられていることを指摘し、さらに彼女が影響を受けた作家の作品にも見られることを指摘する。

ウィリアムスは1992年の作品、『鳥と砂漠と湖と』(*Refuge*, 1992)の冒頭で、都市の中心部からグレートソルトレイクに向かう複雑な道筋を描きだすことで、文明からはずれて道に迷い、新たに自分を自然と再接続するプロセスを示している。この‘Scattered Potsherd’においては、この「道に迷う」モチーフがよりその目的性を強めて描かれている。その意味でこの作品は、突如目の前に起こった理解しがたい光景を眼前にして、文明が示した道を見失い、社会から迷い出て手探りで自然との再接続を試みることで、従来の価値観に変わる新しいパラダイムの必要性を喚起する物語として読むことが可能である。⁵

この作品における道に迷うモチーフとして、例えば1つめのピークである3章において、テロで逃げまどう人々の様子が自身の回想とともに描かれている。飛行機や電車といった交通機関はすべて遮断され、徒歩で、車で、あらゆる方法で逃げようとする人々がここでは描かれているが、方向は示されない。前述したように、電話は繋がらず、コミュニケーションの手段も遮断され、方向を導く手段さえも失っているのだ。ともかくそこから逃げるという意志のみがここでは示される。ウィリアムスはここで、逃げ出す方向を失った群衆の眼差しを、コヨーテに囲まれたヒツジの群れの目に譬えている。人々が文明の中での生活によって獲得したその文明性ゆえに、文明の利器が機能しなくなった時に方向性を失い、文明の中で迷子になる構図がここには存在する。

In my bag, I remember I have a small piece of sandstone that I brought from home, a talisman from the banks of the Colorado River. I stop in the middle of the sidewalk, find it, and hold it tightly in the palm of my hand like a secret and then continue walking in the steady stream of people, dazed, distracted, and scared. (III, para. 2)

ウィリアムスは群衆とともに道を歩きながら、どこにもいく場所がない自分に気付く。そして続くパラグラフにおいて「いったいどこに私は行けばいいのか」と自問する。この文明から自らが迷子になっていることを自覚する瞬間である。方向性を失いさまようウィリアムスがここで心の拠り所として気付くのは、故郷ユタ州から持ってきた砂岩のかけらだ。彼女はそのかけらを握りしめ、行くあてのない道を歩き続けるのだ。

文明から迷子になり、自然に自らを再接続するモチーフはウィリアムス独自のものではない。ウィリアムスが影響を受けたと公言してはばからないソローは著書『ウォールデン』(*Walden*, 1854)の中の章の1つ、‘The Village’で次のように述べている。⁶

...and not till we are completely lost, or turned round — for a man needs only to be turned round once with his eyes shut in this world to be lost — do we appreciate the vastness and strangeness of nature. Everyman has to learn the points of compass again as often as he awakes, whether from sleep or any abstraction. Not till we are lost, in other words not till we have lost the world, do we begin to find ourselves, and realize where we are and the infinite extent of our relations.⁷

ソローはここで道に迷う必要性を説き、西部の辺境まで行かなくとも目を閉じてぐるりと回るだけで、また丘をのぼり、視点を交えるだけでこの世界との関係を見失い、自然との無限のつながりに目覚めると語っている。このように、既存の価値観の呪縛から逃れるためにわざわざ道に迷い、自らの直接体験から真理を導き出そうとするソローの姿勢は、「不信」に陥った人々の眼差しを前にして、新しいパラダイムのあり方を模索するウィリアムスと重なる。

またウィリアムスが意識するもう一人の作家であるレイチェル・カーソン (Rachel Carson, 1907-1964) は、未完の作品『センス・オブ・ワンダー』(*The Sense of Wonder*, 1962) の中で、文明の中で獲得した倦怠や幻滅感を解毒するのに自然の中に身を置く必要性を示唆している。⁸ さらに、自然を探索することで、身近にあるもの全てに対して感受性が強くなる、そしてそれは、目、耳、鼻、そして指先を活用するよう再び学ぶことであり、錆び付いた感覚器官のチャンネルを再び開くことであるとカーソンは語っている。⁹

ウィリアムスはアメリカのオルタナティブな伝統である、ナチュラル・ヒストリーの系譜に倣い、ソロー、そしてカーソンと同じように自然にアメリカの新しいパラダイムを求めているのである。‘Scattered Potsherd’ はこういった意味で、文明の世界から迷子になり、新しい道を探る彷徨の物語であるといえる。

3. 再生への希求

“Scattered Potsherd” はさらに、再生を希求する物語でもある。これまで見てきたことから分かるように、この物語はテロによる様々なレベルでの解体の始まりがまず示され、拠り所を失い、行く先を見失い、帰る場所さえ見あたらない状態にあって新しいパラダイムの可能性を模索するものである。ウィリアムスがここで提示している解体、彷徨、再生のプロセスには二つの問題があるように思われる。一つは、いったい何を拠り所として新しいパラダイムを求めるのかと言う問題、もう一つは、その新しいパラダイムは実現したとしても、果たして私たちにとって信用するに足るものなのかという問題である。

ウィリアムスにとって、一つ目の問いの答えは明確である。例えば、テロから逃げるウィリアムスが自問する「どこにも行く場所がない」という問いかけは、同時に場所の意識を喚起させるものだ。アメリカ経済の、いやアメリカ繁栄の象徴であった世界貿易センタービルが崩れ去り、アメリカの威信の象徴であるペンタゴンが炎上することで、抽象的な概念としてのアメリカは解体される。残されたのはアメリカという具体的な存在、つまり場所、大地である。ここで観念の解体に伴い、アメリカという大地は自らの存在をアイデンティファイしてくれる具体的な存在として顕在化する。

ウィリアムスが目に見えない社会という人間の作り上げた世界から、歩きながら実際に足で踏みしめている場所、自らを育んだ具体的な場所である自然に新たな拠り所を求めているのは、例えば前述の引用にあるように、テロ直後のワシントンを彷徨う彼女が、バックの中に忍ばせていた砂岩を、コロラド川で拾ったお守りとして握りしめていることから明らかである。ウィリアムスにとって、9.11同時多発テロ後の新しい価値観の構築は、この実在する自然から世界を見ることにあるのだ。

それでも疑問は残る。果たしてこの具体的な自然を新しいパラダイムの拠り所として疑うことなしに受け入れてしまっているのだろうか。自然は果たして信用するに足るものなのであろうか。実はウィリアムス自身、既存の価値観とその象徴が目の前で崩れ去るのを確信する一方で、自然をそのまま受け入れることにためらいを表明している。例えば6章において、ウィリアムスは、彼女の夫、そして友人と一緒に川へ降り、祈りを捧げながら、花崗岩の山頂に、そして世界に不動の秩序、「古くて賢い」秩序を求める。

My husband and I, with a friend, walk down to the river to say prayers. Looking up at the granite peaks, one can almost believe the world has not changed. Perhaps we are looking for guidance, perhaps we have been brought to our knees out of a new vulnerability, desperate to know that there is a world older and wiser that remains unchanged. (VI, para. 1)

しかしながら、そのささやかな夢は長くは続かない。続く文章において、川で反射的に石を拾ったウィリアムスは、その石に血が付いているのを見て元に戻してしまうのだ。

I close my eyes. After listening to the voice of rushing water, clear and cold, I open them and rock back on my heels. Instinctively, I pick up a stone. There is blood on the stone. I recoil, immediately placing the stone back in its own bed on the riverbank. (VI, para. 2)

このように、自然に不動の秩序を幻視しようとするウィリアムスのもくろみは崩れ去ってしまう。なぜなら、自然には、その生の裏側につねに死が意識されるからである。同時多発テロを経験した直後のウィリアムスにはこの現実を受け入れがたいものとなる。

There are no other blood-streaked stones around me. This is not what I was looking for, not the answer I was seeking. My mind turns to logic. Fish blood. A cutthroat clasped in the talons of osprey. A fisherman who sliced open the belly of a trout. Surely there is an answer. I did not want this answer. (VI, para. 3)

生命の背後に常に死のイメージが付きまとう自然は、究極的には彼女の避難所 (refuge) とはなりえないのだろうか。彼女は結局、この血を受け入れる。魚の血がついた石を持ち帰る決心をするのだ。現実に背を向けない証としてである。新しいパラダイムの拠り所としてウィリアムスが期待した自然は結局解体されることになる。しかしそこで解体されたものは、人間が形成した文化としての自然であり、流された血は彼女に生と死という観念上の矛盾とともに孕んだ自然として再生する。彼女の自然への信頼は、死という現実によって弁証法的に深められたのである。

終わりに

I am home in the desert. There are steep canyons before me carved away by water, by wind. I see

an opening in the Earth. I feel an opening in my heart. My hands cradle red dirt and I watch it slip through my fingers creating a small rise on the land. To be present, completely present, in these tender and uncertain days. This is my prayer: to gather together, to speak freely without judgement, to question and be questioned, to love and be loved, to feel the pulse, this seismic pulse — it will guide us beyond fear. (XIII, para. 1)

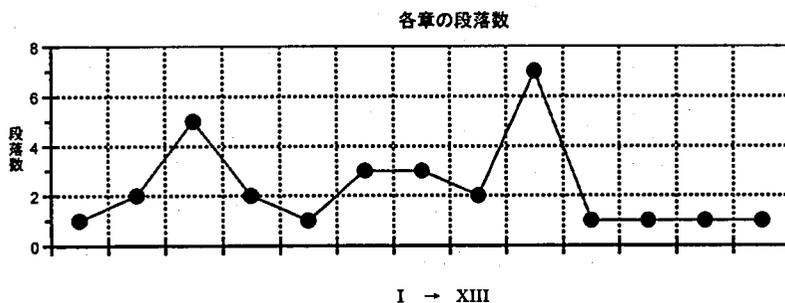
これまでウィリアムスが、自ら体験した同時多発テロをどう受け止め、理解し、この悲劇を克服するために必要とされる新しいパラダイムを模索する様子を彼女の作品の中に考察してきた。上記の引用において、ウィリアムスは最後に、自然が示す、生が死によってのみ成り立つという厳しい現実を受け入れることを表明している。これは9月11日に起こった出来事をもこの枠組みで理解する必要性を語るものである。

“Scattered Potsherds” においてウィリアムスが描いたのは、特定の文化とその価値観に依存しない、生態系をモデルにした倫理の構築に、私たちが同時多発テロの背景に見る、政治的、文化的、宗教的、経済的対立を克服する可能性を見いだすことだったのである。

註

1. “axis of evil statement” の訳。テロの温床となり、また核開発の疑惑を持つとされるイラク、イラン、そして朝鮮民主主義人民共和国をアメリカがそう称した。クリントン元大統領が反米的な国家を指して “rogue states” (ならずもの国家) と語ったことがその前提にあると言われている。2002年1月29日の一般教書演説でブッシュ大統領が使用した。http://en.wikipedia.org/wiki/Axis_of_evil参照。

2. ‘Scattered Potsherd’ の各章の構成は以下のようにになっている。章番号は原文のままの表記に従っている。



章	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII
段落数	1	2	5	2	1	3	3	2	7	1	1	1	1

3. "Scattered Potsherds" from *Orion on line*. New York, N.Y. : Myrin Institute.
<http://www.oriononline.org/pages/00/sidebars/America/TempestWilliams.html> の 3 章 1 段落目より。以降、このエッセイからの引用はその章数と該当段落数を本文に続いて () 内に示す。

4. かつてソローはカターディン山の頂上で、自分の理解を超えた自然を前にして、それでもその自然に何とか自分を接続しようと試みた。

I fear not spirits, ghosts, of which I am one, — that my body might, — but I fear bodies, I tremble to meet them. What is this Titan that has possession of me? Talk of mysteries! — Think of our life in nature, — daily to be shown matter, to come in contact with it, — rocks, trees, wind on our cheeks! The solid earth! the actual world! the common sense! Contact! Contact! Who are we? where are we? (Henry David Thoreau. *The Maine Woods*. New York : Penguin Books, 1988. 71. 下線は筆者による。)

5. Terry Tempest Williams, *Refuge: an unnatural history of family and place*. New York : Vintage Books, 1992. p. 5 より。

6. ウィリアムスはマッカーディの美しいイラスト入りの『ウォールデン』150周年記念版の前書きを担当していることでも話題になった。

7. 引用元は *Walden and Resistance to the Civil Government*, (New York: W. W. Norton & Company, 1991), 115. から。

8. ... as an unfailing anti-dote against the boredom and disenchantments of later years, the sterile preoccupation with things that are artificial, the alienation from the sources of our strength. (*The Sense of Wonder*, 54)

9. Exploring nature with your child is largely a matter of becoming receptive to what lies all around you. It is learning again to use your eyes, ears, nostrils and finger tips, opening up the disused channels of sensory impression. (*The Sense of Wonder*, 67)

参考資料

Fey Beebe. "Exploring the the Process of Writing : A Conversation with Terry Tempest Williams." ASLE-Japan/文学・環境学会『文学と環境』第 8 号。2005年10月。

Rachel Carson. *The Sense of Wonder*. New York : Harper Collins Publishers, 1998.

Henry David Thoreau. *The Maine Woods*. New York : Penguin Books, 1988.

_____. *Walden and Resistance to the Civil Government*. New York: W. W. Norton & Company, 1991.

_____. *Walden: Or Life in the Woods*. Forward by Terry Tempest Williams. Boston: Shambhala Publication, Inc., 2004.

Terry Tempest Williams. *Refuge: an unnatural history of family and place*. New York: Vintage Books, 1992.

_____. 'Scattered Potsherd'. *Orion on line*. New York, N.Y. : Myrin Institute.

<http://www.oriononline.org/pages/00/sidebars/America/TempestWilliams.html>

伊藤詔子、『よみがえるソロー』、柏書房、1998年。

坂本龍一 他 監修、『非戦』、幻冬舎、2002年。

野田研一、結城正美 編、『越境するトポス』、彩流社、2004年。